

金日成の著作の記述削除，修正と金正日の 「社会政治的生命体論」「革命的首領観」

黒 坂 真

要旨

金日成はかつてスターリンとソ連，中国を礼賛していた。金日成の著作ではその後この部分が削除，修正されていった。本論はこの史実と金正日の「社会政治的生命体論」「革命的首領観」の関係およびその資源配分上の意味を考察する。金日成の著作の記述修正は金正日による何らかの決済を経てなされたと考えられる。映画や音楽に造詣のあった金正日は，金日成を首領とする「社会政治的生命体」の一員として首領と一体化しているという陶醉感に人々を浸らせることが独裁体制を強固にするために重要であると考えていた。金正日は「革命的首領観の確立」により，崇拜労働の効率を向上させようとした。モデル分析により崇拜労働結晶物の効率が向上すると，財の生産労働を減らし，崇拜労働を増やす場合があることがわかった。財の生産が減少すると，独裁体制を支える層の消費が減少し独裁体制の存続が困難になりうる。金正日による「贈り物政治」が困難になる。

キーワード：金日成 金正日 スターリン 社会的政治生命体 革命的首領観

1. 本稿の課題と構成

金日成はかつて，スターリンとソ連，中国を礼賛した。金日成の著作ではこの部分が削除，修正されていった。本論はこの史実と金正日の「社会政治的生命体論」「革命的首領観」の関係およびその資源配分上の意味を考察する。黒坂（2013）は金日成の著作を資源配分上の効率性という観点から解釈することを提起した。本稿もこの視点を踏襲する。映画や音楽に造詣のあった金正日は，人々が金日成を首領とする「社会的政治生命体」として一体化しているという陶醉感に浸らせることが独裁体制を強固にするために重要であると考えていた。金正日は「革命的首領観の確立」により，崇拜労働結晶物の効率を向上させようとした。モデル分析により崇拜労働結晶物の効率が向上すると，財の生産労働を減らし，崇拜労働を増やす場合があることがわかった。財の生産が減少すると，独裁体制を支える層の消費が減少し独裁体制の存続が困難になりうる。金正日による「贈り物政治」ができなくなるからだ。

金日成は初期の著作で，スターリンとソ連，中国を礼賛していたが，80年代から刊行された「金日成著作集」では礼賛部分が削除ないしは修正された。これは金正日による何らかの決済を経てなされたと考えられる。私の手元には1952年刊行の「金日成選集第一巻」

「金日成選集第二巻」(三一書房)、1966年刊行の「金日成二巻選集」(新日本出版社刊行)、1970年刊行の「金日成著作集」(第1-5巻、未来社刊行)と金日成著作集」(平壤外国文出版社刊)がある。表記を簡便化するため以下これらを「52年本」「66年本」「70年本」と略す。1980年から99年まで刊行の「金日成著作集」(平壤外国文出版社刊)を「著作集」と略す。2で金日成の著作、金日成の「教示」と金正日の「お言葉」などが、北朝鮮社会でどのような役割を果たしているのかを明らかにする。3で金日成の著作からスターリンとソ連、中国に関する礼賛が削除あるいは修正されたことを示す。これは、金正日による何らかの決済を経ていると考えられることを公式文献や非公式資料、脱北者の手記により示す。4で金日成の著作の記述が変化したことの資源配分上の意味を検討する理論モデルを提示する。5で本論の主な結論を要約する。

2. 「金日成著作集」、金日成の「教示」、金正日の「お言葉」と北朝鮮社会

金正日は「チュチュエ思想教育で提起されているいくつかの問題に関して」で金日成の著作について次のように述べた。

「偉大なる首領金日成同志の労作はチュチュエの思想、理論、方法が全面的に集大成されており、革命と建設において提起される全ての理論、実践的問題を解決するための具体的方途を明白に示している。首領様の労作には党の領導のもとにわが人民が困難で複雑な闘争の中、成し遂げたあらゆる高貴な経験と光り輝く業績が、幅広く深さを持って総括されており、我々が指針とすべき根本原則と戦略戦術が全面的に明らかにされている。偉大な首領様の労作は革命と建設に関する真理を集大成した百科全書であり、チュチュエ思想の叢書である。偉大なる首領金日成同志の労作こそ、我々が研究せねばならない、最も貴重な古典である」(金正日(2011, p 383))。

この論文は1986年7月15日に出されたとされている。金正日はこの論文が外国にも普及されることを前提としているから、「金日成著作集」を北朝鮮の体制宣伝文献として位置づけていたといえる。金正日は60年代後半には朝鮮労働党中央の宣伝扇動部で活動していたようだが、指導的地位を確立したのは以下で示すように74年頃と考えられる。在日本朝鮮人総連合会編「金正日略伝」(p 53)によれば、1974年2月13日の朝鮮労働党中央委員会第五期第八回総会で、金正日を朝鮮労働党政治委員会委員として金日成の唯一の後継者に推挙した。数々の政敵の粛清を経て67年頃には、金日成の教示を最高の指針とすることが朝鮮労働党と北朝鮮社会で確立されていたと考えられる。「労働新聞」の社説「主体思想を徹底的に具現することはわが革命勝利の確固たる担保である」(1967年12月28日)はそれを示唆している。この社説には、「党の唯一思想体系を確立する」という表現がある。この時期に、以下で説明する「党の唯一思想体系確立の十大原則」のひな形が形成されたと考えられる。北朝鮮の様々な組織、社会団体で関連する金日成の「教示」、金正日の「お言葉」に依拠した組織方針を記した文書がそれぞれ存在していると考えられる。その文書はごく一部を除いて外部には公開されていないから、我々は公開された「金日成著作集」「金正日著作集」、そのほかの北朝鮮当局が公開する文献により「教示」

「お言葉」の内容とそれらが北朝鮮社会に与えた影響について検討していくしかない。張（1991, p 170-178）には1977年1月に北朝鮮から在日本朝鮮人総連合会に伝達された「偉大な首領金日成主席様の新年教示と、英明な指導者金正日同志のお言葉を貫徹するための1977年総連の事業方針」という文書が掲載されている。このような文書が、北朝鮮内の各組織、社会団体に伝達されているのだろう。対南工作の幹部工作員だった金東赫氏の著書に興味深い記述がある。金東赫（2004, p 57）によれば金日成は「同志らは党の戦略戦術的な問題について、公開すべきものと公開してはならないものを、厳しく区分せねばならない」と話した。公開すべきものは、「労働新聞」や「金日成全集」など一般金日成文書を通じて公開された（同書 p 57）。なお、「金日成著作集」（70年未来社刊行第三巻，81年朝鮮平壤・外国文出版社刊行第18巻）でも、「祖国統一の具体的な方途について」という項目は「内容は省略」と記されている（「祖国統一の偉業を実現するために全力をあげて革命勢力を強化しよう—朝鮮労働党中央委員会第四期第八回総会でおこなった結論—一九六四年二月二十七日」）。張（1991）掲載の「事業方針」も公開してはならないものの一つであろう。他の非公開指令としては、在日本朝鮮人総連合会中央本部の財政局副局長だった韓光熙による著作（2002, p 180-184）に、金日成、金正日による「お言葉」（マルスム）が記されている。韓によれば、85年5月に金日成のマルスムが祝電で届いた。マルスムの中で金日成は在日商工人を「総連の基本群衆」「愛国事業の主人」とよび、商工人重視の姿勢を打ち出した。これによってさくらグループの全演植、朝鮮画報社の文東建が在日本朝鮮人総連合会の副議長になったと韓は述べている。86年9月15日には金正日から、「総連はもっと活発に企業活動を展開していかなければならない」という趣旨のマルスムが届いた（同書 p 184）。韓によれば、在日本朝鮮人総連合会中央本部の財政局はマルスムが届いたその日から年末にかけて、連日のように会議を開き、パチンコ事業に乗り出すことになった。

北朝鮮当局が非公開としている文書の中で、北朝鮮社会に大きな影響を及ぼしていると考えられるのは「党の唯一思想体系確立の十大原則」である。韓（2002, p 153）によれば、74年2月の在日本朝鮮人総連合会第十回全国大会の際、東京に集まった約3000人の幹部の前でこの「十大原則」が発表された。「学習組」という、朝鮮労働党の在日本非公然の構成員全員に「十大原則」を漏らさず記述した「学習組手帳」という赤い手帳が交付された（同書 p 155）。「非公開」といっても、約3000人の前で当時の在日本朝鮮人総連合会副議長が読み上げたのだから、機密文書というほどの位置づけではありえない。日本共産党中央委員会が発行している「世界政治—論評と資料」1988年4月上旬号に「党の唯一思想体系確立の十大原則」の日本語訳が掲載されている。同誌編集部によれば、これは日本に伝えられた朝鮮語の小冊子の複写から翻訳したものである。在日本朝鮮人総連合会編の「金正日略伝」（1995年, p 56）によれば、金正日は1974年4月14日に金日成の偉大さと不滅の業績を全面的に明らかにし、全党と社会に金日成の唯一思想体系を確立するための諸原則を明らかにした。これは、「党の唯一思想体系確立の十大原則」を指していると考えられる。康明道（1998, p 75-76）によれば、朝鮮労働党は1974年2月に党全体会議を

開催して、金正日を党秘書兼中央委員会政治委員に任命した。康明道（1998, p 73-75）によれば、金正日が金日成やパルチザン出身の大幹部から支持を得るきっかけになったのは、金正日が発表した歌劇「血の海」であった。「血の海」は30年代に金日成らによるパルチザン闘争をテーマにしていた。在日本朝鮮人総連合会編「金正日略伝」（p 40-42）によれば、金正日は金日成の文芸理論を具現して文学・芸術革命を起こすための独創的な方針をうちだし、文学・芸術の開花・発展に大きく貢献した。これは、康明道の前掲著の記述を裏付けている。北朝鮮に拉致されその後ウィーンから脱出した映画監督申相玉（1989, p 90）は、北朝鮮映画界で最高の権威者は金正日であり、北朝鮮のどんな映画監督やシナリオ作家よりも抜kindでた才能と実力を持っていると評価している。申相玉（1989, p 90-92）によれば金正日は自分の映画文献庫に1万5千余本のフィルムを所蔵していた。フィルムの殆どは、版權料を払って入手したものでなく、違法で入ってきたものがほとんどである。海外で収集したフィルムは、外交郵袋で映画文献庫に送られた。また康明道（1998, p 200-202）によれば金正日は39号室という金正日が権力基盤を確立するための資金を獲得、管理する部署を作った。39号室は金鉉や銀鉉、亜鉛鉉、精錬所を独占している。水産物や松茸も39号室を通してでなければ輸出できない。金正日は獲得した資金で幹部たちにテレビやラジオ、冷蔵庫、オメガ、ローレックスなど外国製品を配った。「党の唯一思想体系確立の十大原則」の九は「偉大な首領金日成同志の唯一的指導の下に、全党、全国、全軍が一体となって動く強い組織規律を確立しなければならない」である。九の二は次である。「すべての活動を首領の唯一的指導体系に依拠して組織し、政策的諸問題は、首領の教示と党中央の結論によってのみ処理されるという強い革命的秩序と規律を確立しなければならない」。ここでいう「党中央」とは、金正日を指している。「党の唯一思想体系確立の十大原則」の十の一は、「党中央の唯一的指導体制を確立しなければならない」と規定している。これらの記述、特に「党中央の唯一的指導体制」に依拠して、北朝鮮では金正日が広範な問題について決裁をするようになっていったと考えられる。張（2013, p 118）によれば金正日による批准制度が生まれたのは70年代半ば頃からである。70年代の末頃から、北朝鮮の内閣、軍、政府の全ての文献（決裁書類）は該当する朝鮮労働党中央の上級部署を通じて朝鮮労働党組織部に集中するよう法制化されたと張は述べている。金正日が在日本朝鮮人総連合会への秘密指令を出すことができたのは、「党の唯一思想体系確立の十大原則」により「党中央」として金正日が規定されていたからである。北朝鮮に拉致された韓国人李在根は、朝鮮労働党に入党する準備をしると朝鮮労働党秘書に言われ、「党の唯一思想体系確立の十大原則」と朝鮮労働党の規約に精通し「金正日現地指導」を正確かつ体系的に覚えるという学習をさせられたという（李（2002, p 110-111）。李在根によれば、「党の唯一思想体系確立の十大原則」が北朝鮮の住民たちの思考と行動、生き方を日常的に規律する最高の規範である（同書 p 111）。財団法人韓国軍事問題研究院（2013, p 257-259）によれば、「党の唯一思想体系確立の十大原則」は北朝鮮の住民が憲法や法律を知らないでいても、これだけは必ず知り、守らねばならないものである。「党の唯一思想体系確立の十大原則」は朝鮮労働党をはじめとする全ての政治組織の最高目標

であり活動原則である。北朝鮮の住民はこれにより首領への絶対的な忠誠を強要され、監視と統制を受けている。

北朝鮮の住民生活に朝鮮労働党の指令はどのように浸透させられているのだろうか。この件については、財団法人韓国軍事問題研究院（2013）が詳しいので、以下これに依拠して説明する。北朝鮮の全ての政治組織は労働党を中心に行っている政治共同体である。この政治共同体の目的は首領の思想を中心にした党の唯一思想体系と唯一の指導体系の構築である。唯一思想体系とは首領の思想で全社会を一色化し首領の命令と指示により全社会を一つのようにして動かすことである（同書 p 257）。同書（2013, p 262-263）は北朝鮮の住民の日々の生活について次のように説明している。北朝鮮の全ての住民は各自が所属している団体別に政治学習、生活総和、技術会議など休む暇もなく各種の集まりに悩まされる。生活総和とは、各住民が所属する組織（労働党、少年団、青年・職業・女性・農民同盟）で1週間に1度、反省の時間を持つ制度であり、そこでは自分および相互を批判する決戦場でもある。全ての機関は日課の始まる30分前に労働新聞の社説、論評の読み合わせ会を行う。水曜学習、金曜講演、土曜生活総和がある。常に降りてくる党の特別指示がある。1960年13歳の時に一家で北朝鮮に渡り、1996年に中朝国境より脱出した宮崎俊輔は、北朝鮮の咸鏡南道新興郡東興里の農場員だった。宮崎（2000, p 94-96）によれば北朝鮮では農場員に限らず全ての労働者は仕事が終わったあと、「作業総和」という点検をせねばならない。そのあと週に二回は金日成の教示や主体思想、朝鮮労働党の歴史、新聞購読などの学習会に参加しなければならない。金日成の教示は絶大な権威をもち、憲法よりも上位にあり、職場でもめ事が起きた場合には金日成の教示を引いて議論することがよくあるという。

これらより、70年代中頃には金正日は北朝鮮社会で「党中央」として「唯一指導体系」を確立しており、金日成の著作を削除、修正する権限を保持していたと考えられる。

3. 金日成によるソ連、中国礼賛と「著作集」での削除

我々が取り上げる金日成の論考は以下の7点である。表記簡便化のため、論文1から7と記載する。題名と発表日が多少異なっている場合には同じものとして扱う。

論文1「現情勢と当面の任務—朝鮮労働党中央委員会第三回定期会議における報告1950・12・21」52年本 p 105-144。「著作集」第6巻では「現情勢と当面の任務—朝鮮労働党中央委員会第三回総会でおこなった報告」（1950年12月21日）。p 164-191。

論文2「偉大なソヴェト軍隊によって解放された八・一五第六周年記念報告」（一九五一・八・一五）。52年本 p 185-206。「著作集」第6巻では「八・一五解放六周年記念平壤市慶祝大会でおこなった報告」（一九五一年八月十四日）。p 401-412。

論文3「大十月社会主義革命と朝鮮人民の民族解放闘争（一九五一・十一・二）」52年本 p 207-226。

論文4「英雄的な中国人民志願軍将兵におくる新年の挨拶（一九五二・一・一）」52年本 p 231-233。

論文5「プロレタリア国際主義と朝鮮人民の闘争（一九五二・四・二七）」52年本 p 238-254, 「著作集」第7巻では「プロレタリア国際主義と朝鮮人民の闘争（一九五二年四月二十五日）p 157-168。

論文6「すべての力を新しい民主朝鮮建設のために——平壤歓迎市民大会で行った演説（一九四五年十月十四日）」「著作集」第一巻 p 332-339

論文7「重要産業の国有化について（一九四六・八・一〇）」52年本 p 112-118, 66年本 p 43-49, 70年本 p 50-55, 「著作集」第二巻 p 323-329。

表1に上記論文の掲載有無をまとめた。△は、論文名ないしは日付が多少変わって掲載されていることを示す。

表1 論文掲載の有無

	52年本	66年本	70年本	著作集
論文1	○	×	×	△
論文2	○	×	×	×
論文3	○	×	×	×
論文4	○	×	×	×
論文5	○	×	×	×
論文6	×	×	×	△
論文7	○	○	○	○

以下、上記論文の中で注目すべき記述を指摘する。論文1には次の記述がある。

「アメリカの掠奪者どもは、今日の朝鮮人がもはや昨日の植民地奴隷いでなく、偉大なソヴェト軍によって解放され、五年のあいだ、わが祖国の北半部に強力な民主基地をきずきあげ、みずからの政権のもとで自由と権利と幸福を直接に体験した自民であるということに想到しえなかったのである」(p 111)。

「このように、わが人民軍部隊と全朝鮮人民は、ただ自分たちだけで孤立した闘争をおこなっているのではなく、偉大なソ同盟の私心のない援助をたえずうけ、また偉大な中国人民の直接的な援助をうけており、さらに全世界の自由愛好人民のふだんの声援をうけている」(p 114)。

「第三に、わが朝鮮人民が孤立してたたかっているのではなく、ソ同盟を先頭とする人民民主主義諸国の物質的・精神的な援助をうけており、とくに中国人民志願部隊がわが祖国解放闘争に直接参加して援助することによって、われわれの最後の勝利への自信をいよいよかためさせたことである」(p 116)。

「著作集」第6巻にはこれらの記述はない。論文1の次の記述も興味深い。

「偉大な中国人民と朝鮮人民のあいだに、長期の革命闘争をつうじての、かっこたる親善関係と兄弟関係が存在してから、すでにひさしい。すなわち、中国革命の各段階

において、また八年間の抗日戦争をつうじて、朝・中両国人民のあいだには、共通の敵—日本帝国主義者にたいする闘争のなかでためされ、戦闘的な洗礼をうけてきた相互共助と兄弟的な親善関係が固く結ばれたのであった。こんにち、両国人民の共同の敵—アメリカ帝国主義武力侵略者どもにたいする闘争において、両国人民のあいだに兄弟的な相互援助の関係が確立していることを、だれがあえて反対しえようか。このように、戦争行程での偉大な中国人民と朝鮮人民との親善関係は、さらにいっそう強化されたのである」(p 132)。

「著作集」第6巻でこの部分に該当すると考えられる記述は次である。

「中国人民と朝鮮人民のあいだには、帝国主義に反対する長期の革命闘争を通じて戦闘的遊戯と兄弟的友好関係が結ばれています。祖国解放戦争の過程で中国人民と朝鮮人民の伝統的な友好関係はさらに強化されました。いかなる力も共通の敵、アメリカ帝国主義武力侵略者との戦いで血で結ばれた朝中両国人民の友好関係をうち破ることはできません」(p 183)。

1981年刊行の「著作集」第6巻では、52年本に記載されていた中朝関係の記述がかなり削られた。特に、「中国革命の各段階」「八年間の抗日戦争」でためされてきたという相互共助と兄弟的な親善関係と、「偉大な中国人民」という記述がなくなっていることに注目したい。

論文2は「著作集」第6巻では「八・一五解放六周年記念平壤市慶祝大会でおこなった報告」(一九五一年八月十四日)になっている。論考の題名が変わり、日付が一日ずれている。66年本、70年本にはこの論考は掲載されていない。論文2には次の記述がある。

「またこれは、六年前、偉大なソヴェト軍隊が、約半世紀にわたる日本帝国主義の奴隷的生活のもとで伸吟していたわが朝鮮人民を解放し、その後約五年間の平和な民主建設を実施しよう一切の条件をあたえてくれたおかげである。(万雷の拍手)。わたしは、今日、わが朝鮮人民を解放し、民主建設と朝鮮人民の自由と独立のための闘争にたいして、不断に限りない誠意ある援助をあたえてくれた偉大なソ同盟人民と、その指導者であり、朝鮮人民の親友であるスターリン大元帥に、全民族的な感謝と栄誉をささげるしだいである(満場総起立で、万雷の拍手がながくつづき、場内を震動さす)。」。

「著作集」にはこの記述はない。論文2の最後の部分には、次の記述がある。

「われわれの解放の恩人であり、全世界勤労人民の教師であり、指導者である偉大スターリン大元帥万歳！(満場総起立で、万雷の拍手がながくつづく)。中国人民の指導者毛沢東主席万歳！(万雷の拍手がながくつづく)。」

「著作集」にはこの記述はない。論文3で金日成は次のように述べている。

「同志スターリンの輝かしい著作は、東方における革命運動の道を照らし、英雄的な闘争をおこなうために、朝鮮のもっとも立派な息子たちを武装させ、かれらに人民の力とかれらの勝利への、つぎることのない確信をふきこんだ。」(p 211)。

「また、われわれはソ同盟の無私の援助のおかげで、民族の指導的人材を訓練した。

つまり、北朝鮮における民主的建設のすばらしい成功は、とりわけソ同盟の援助によるものである。」(p 212)。

「朝鮮人民は、偉大なスターリン憲法—世界でもっとも民主的な憲法—の影響が最高人民会議で採択された朝鮮民主主義人民共和国憲法に反映していることを誇りとしている」(p 215)。

「民主陣営の人民の兄弟的な連帯性をもっとも生き生きとあらわしたものは、中国人民志願軍が朝鮮にあたえた援助である。わが偉大な隣人の比類のない勲功は、感謝をささげている朝鮮人民の記憶に永遠に残るであろう」(p 222)。

論文4には次の注目すべき記述がある。

「四億七千五百万の中国人民は、偉大な毛沢東主席と中国共産党の指導のもとで、抗美援朝運動に総けっ起している。」(p 232)。

論文5には次の注目すべき記述がある。

「もしわれわれが、偏狭な民族主義の殻からぬけ出ることができず、友好的な諸国人民との連けいを絶ち、これら諸国の支持を失ってしまうならば、われわれはすでに疑もなく、野獸的なアメリカ帝国主義者どもによって併呑されてしまったであろう」(p 240)。

「ソ同盟は、日本帝国主義者の支配から、わが国を解放してくれた。プロレタリア国際主義の偉業に忠実なソヴェト人民は、解放後もわれわれに莫大な援助をあたえてくれた。もしこの援助がなかったならば、われわれは、我が国の人民民主主義制度を強固にする重要な政治的・経済的変革を実施することができなかったであろう」(p 241)。

「北朝鮮において、夏期は食糧事情のもっとも困難な時期である。戦争はわれわれの食糧事情を極度に悪化させた。朝鮮民主主義人民共和国政府が、全力をつくして食糧難の克服に努力しているこのときに、同志スターリンはわれわれの困難を明察し、ソヴェト人民の贈り物として、食糧五万トンを受けとってくれるようにと、われわれに申入れてきた。われわれは、偉大な指導者であり、教師である同志スターリンにたいする無限の感謝と喜びをもって、この贈り物をうけとった」(p 246)。

「民主陣営の人民の兄弟的団結の際立った現れは、偉大な中国人民とその英雄的な志願部隊の朝鮮にたいする援助である」(p 246)。

「すでに指摘したように、朝鮮戦争に中国人民志願軍が参加したことは、民主陣営の国家間における、不滅の親善と相互援助の新しい形態であり、平等権と相互尊敬の私心なき原則にもとづいて、強い国家が弱い国家にあたえる気高い援助である」(p 247)。

「著作集」第7巻掲載の論考にはこれらの記述はない。52年本に明記されていても、後の「金日成著作集」で削除された部分はこれだけではないが、これだけでも「著作集」を編纂した北朝鮮当局の意図は明白だろう。北朝鮮当局は、金日成がかつて「スターリンとソ連が朝鮮を解放した」と認めスターリンを礼賛していたこと、毛沢東と中国人民を偉大と礼賛していたことを隠したかったのである。また論文5で金日成は、「友好的な諸国人

民との連携、支持」がなければ北朝鮮は米国により併呑されてしまったらということ、北朝鮮は弱い国家である旨述べていた。この類の記述も、金日成を神格化するためには大問題であるから、後の「著作集」では削除したと考えられる。

論文6は、ソ連軍について次のように述べている。

「わたしはまたこの席をかりて、朝鮮人民の解放の大業を助けた英雄的なソ連赤軍に心から感謝をささげます」（「著作集」第一巻、p 333）。

論文7は、52年本、66年本、70年本および「著作集」いずれにも掲載されているが、結びの部分が52年本、66年本、70年本と「著作集」では異なっている。52年本にはソ連が次のように記されている。

「朝鮮人民の親密な友であり、解放者であるソ同盟万歳！」

66年本、70年本ではこの部分は次になっている。

「朝鮮人民のもっとも親しい友であり解放者であるソ連人民万歳！」

「著作集」では次になっている。

「朝鮮人民のもっとも親しい友であり援助者であるソ連人民万歳！」

要は、ソ連が以前は「解放者」とされていたが、「著作集」からは「援助者」になったのである。「著作集」第一巻は1980年4月発行と奥付に記されている。「著作集」を編纂した北朝鮮当局は、ソ連軍が「朝鮮人民の解放」に果たした役割は補助的なものであるという見解を広めようとしたのである。そのために、かつて金日成がスターリンや毛沢東を偉大であると主張した部分を削除したのであろう。黄長燁（1999、p 64）によれば、1958年以後黄ら朝鮮労働党書記室は金日成の著作から「スターリン万歳！」という部分を削除したという。しかし、52年本、66年本、70年本の論文7の最後には、「ソ連人民の偉大な指導者であり、朝鮮人民の親しい友であるスターリン大元帥万歳！」という記述があるから、全ての著作でそれらが削除されたわけではない。「著作集」第二巻の論文7の最後では、スターリンが大元帥でなく「同志」になっている。「大元帥」から「同志」への改ざんは80年当時の北朝鮮当局の姿勢を物語っている。先に述べたように「著作集」が刊行された時期には金正日が北朝鮮社会で絶対的な指導権を確立していた。従って金正日が何らかの形で、金日成の著作のスターリンやソ連、中国礼賛部分の削除や修正を承認していたと考えられる。金正日は80年代には「親愛なる指導者同志」と呼ばれていた。金正日の狙いは、外部世界の情報流入を防ぎ、人民が自らの生き方や行動を決定する際に朝鮮労働党の提示する以外の選択肢を想像できないようにすることでもあった。金正日による「革命的首領観」はそのように解釈できる。金正日（1986、p 380）は次のような「革命的首領観」を提起した。

「チュチェ思想は肉体的生命の要求を充足させるために生きる生活は動物の生活と変わりなく、首領、党、大衆を離れて孤立して生きる生活は人間の社会的本性に反する価値のない生活とみなす。チュチェ型の共産主義革命家はただ党と首領の領導のもとに革命的義理と同志愛で固く団結し人民大衆の自主性を実現するだけの共同偉業に身を捧げて闘争することに真の生きがいと幸福を体験する。従って、革命的首領観は革

命的人生観の核心であるということが出来る」

金正日の著作のひとつの特徴は、多少表現を変えているだけで同じような話が長く続くことである。音楽と映画に造詣があった金正日は同じような話を住民に何度も聞かせることにより、思考力を麻痺させ住民を首領との一体感で陶酔させようとしたのだろう。また金正日（1986, p 381-382）には次の記述がある。

「我々は何よりも、他国の偉人ではなくまさにわが首領様が日本帝国主義統治の暗澹たる時期に全ての艱難辛苦を克服し、失われた祖国を取り戻され、この地に繁栄する社会主義祖国を建設して下さったことを知らねばならない」

この部分はまさに、金正日が金日成の著作のスターリンやソ連、中国礼賛部分の削除や修正を承認していたことを示唆している。金正日の著作のこれらの部分に対応する「お言葉」がどこかの時点で出されていると考えられる。李羅英（1958）は52年本に対応する金日成の闘争史である。この本の第十章第四節には「偉大なソビエト軍によって、日本帝国主義は敗北し、ついに朝鮮人民は日本帝国主義のくびきから解放された」という記述がある（同書 p 506）。この類の記述は金正日の「革命的首領観」と矛盾している。申相玉（1989, p 22-25）によれば、筆者李羅英は申相玉が連行された政治保衛部第六所という政治犯収容所に収監されていた。李羅英は自分の罪を金日成の「抗日闘争妨害罪」と認識していたが、北朝鮮では政治犯に裁判がないので正確な罪名はわからない。

本稿は、北朝鮮社会における各種の政治学習、生活総和、会議と相互批判などを一括して「崇拜労働」と解釈する。我々は金正日が、金日成を神格化することにより崇拜労働の効率を向上させようとしたと解釈する。次に、金日成の著作で、スターリンとソ連、中国に関する記述が削除あるいは変化したことの資源配分上の意味を検討するモデルを提示する。

4. モデル

独裁者、党幹部と人民から成る社会主義国を想定しよう。独裁者を党幹部と合わせて考える。人民は n 人いるが、等質的なので一般性を失うことなく 1 人と想定できる。人民は労働で財を生産する。生産関数を次のようにコブ・ダグラス型とする。

$$X = AL^{\gamma} \quad A > 0 \quad 0 < \gamma < 1 \quad (1)$$

人民の保有する総労働 $\bar{L}$ は、財の生産と独裁者への崇拜に配分される。生産された財のうち、 α を独裁者、残りの $1-\alpha$ を人民が受け取る。人民は財の生産労働の他に、独裁者に対する崇拜労働 $(\bar{L}-L)$ を行う。独裁者は人民の行う崇拜労働 1 単位に対し、実質賃金 w を支払う。人民の所得 Y は次になる。

$$Y = w(\bar{L}-L) + (1-\alpha)X \quad (2)$$

人民は独裁体制から離れたとき、 ω の留保所得を得られるとする。独裁者が人民を支配するためには、留保所得以上の所得を人民に保証せねばならない。留保所得総計は $\omega\bar{L}$ であるから、次の関係が成立する。

$$w(\bar{L}-L)+(1-\alpha)X \geq \omega \bar{L} \quad (3)$$

独裁者には留保所得以上の所得を人民に与える誘因はないので，(3)式は等式で成立する。

$$w(\bar{L}-L)+(1-\alpha)X = \omega \bar{L} \quad (4)$$

(4)式は人民が独裁者との契約に参加するための条件である。人民は所得を全額消費する。人民の効用は消費と，崇拝労働を行うことにより生じる不効用から成る。人民の効用関数を次のように対数型とする。

$$U^p = \ln C - b \ln(\bar{L}-L) \quad b > 0 \quad (5)$$

人民は効用を最大化するように労働配分を決定する。効用最大化条件は次になる。

$$\frac{b}{\bar{L}-L} = \frac{w - \gamma(1-\alpha)AL^{\gamma-1}}{w(\bar{L}-L) + (1-\alpha)AL^{\gamma}} \quad (6)$$

(6)は人民の誘因制約である。(4)(6)より，崇拝労働実質賃金 w と財生産における分配率 $1-\alpha$ を財生産労働の関数として次のように表せる。

$$w = \left\{ \frac{bL + \gamma(\bar{L}-L)}{\bar{L}-L} \right\} \frac{\omega \bar{L}}{\{L + \gamma(\bar{L}-L)\}} \quad (7)$$

$$1-\alpha = \frac{L^{1-\gamma}(1-b)\omega \bar{L}}{A \{L + \gamma(\bar{L}-L)\}} \quad (8)$$

我々のゲームの構造は次のようになる。はじめに独裁者が人民に崇拝労働の実質賃金と財生産における分配率を提示する。人民はこれを見て，効用を最大にするように労働配分を決定する。このゲームを後ろ向きに解くことにより，部分ゲーム完全均衡を導く。独裁者は，(7)(8)で示される人民の効用最大化行動を知っている。独裁者は，生産されたもののうち α だけ得る。人民に崇拝労働の賃金支払いをするので，独裁者の所得 Y^D は次になる。

$$Y^D = \alpha X - w(\bar{L}-L) \quad (9)$$

独裁者の所得は，人民の参加制約を考慮すると次になっている。

$$Y^D = X - \omega \bar{L} \quad (10)$$

人民が行う崇拝労働により，独裁者の銅像や絵画，映画，歌曲，小説などが作られて独裁者はそれらにより満足を得る。崇拝労働の結晶物 X^c の生産関数を次のようにコブ・ダグラス型とする。

$$X^c = B(\bar{L}-L)^\varepsilon \quad B > 0 \quad 0 < \varepsilon < 1$$

パラメーター B は，崇拝労働の結晶物における生産性，効率を示す。金正日は，金日成の著作から「全社会のチュチェ思想化」に不都合な部分を削除，修正し崇拝労働の生産性を向上させようとした。独裁者は所得を全額消費する。独裁者の効用 U^D は，消費と崇拝労働に依存する。独裁者には，最低限の消費水準 C^M と最低限の崇拝労働結晶物の水準 X_M^c があるとしよう。独裁者の効用は消費と，崇拝労働の結晶物から得られる満足感から成る。独裁者の効用関数を次のように想定する。

$$U^D = g \frac{(C - C^M)^{1-\theta}}{1-\theta} + (1-g) \frac{\{B(\bar{L} - L)^\varepsilon - X_M^C\}^{1-\sigma}}{1-\sigma}$$

$$0 < g < 1 \quad 0 < \theta < 1 \quad 0 < \sigma < 1 \quad (11)$$

独裁者は、効用を最大するように人民に提示する崇拝労働実質賃金を決定する。崇拝労働実質賃金は(7)で示されているように財生産労働の関数であるから、効用を最大にするように独裁者が財生産労働を決めると考えることもできる。独裁者の効用最大化条件は次になる。

$$\frac{g\gamma A L^{\gamma-1}}{(A L^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^\theta} = \frac{(1-g)B(\bar{L} - L)^{\varepsilon-1}}{\{B(\bar{L} - L)^\varepsilon - X_M^C\}^\sigma} \quad (12)$$

(12)の左辺は、財生産に1単位労働を配分したとき、財消費から得られる限界効用を示す。右辺は、崇拝労働に1単位労働を配分したとき、それから得られる限界効用を示す。効率的な労働配分のためには均衡でこれらが均等化していなければならない。均衡の財生産労働を L^* とおく。外生変数が変化したときに均衡の財生産労働がどのように変化するかを検討する。比較静学の結果は次のように解釈できる。

他の条件を一定にして崇拝労働結晶物の効率 B が上昇すると、崇拝労働の結晶物から得られる限界効用が大きくなる場合と、小さくなる場合がある。前者で考えよう。崇拝労働の限界効用は崇拝労働に関して減少関数である。効率的な労働配分のためには、崇拝労働を増やして崇拝労働からの限界効用を小さくせねばならない。これは財生産労働を減らすことである。他の条件を一定にして独裁者の最低要求消費水準 C^M が上昇すると、財の消費から得られる限界効用が大きくなる。財の消費から得られる限界効用は財生産労働に関して減少関数である。効率的な労働配分のためには、財生産労働を増やして消費からの限界効用を小さくせねばならない。他の外生変数についても同様に解釈できる。均衡の財生産労働と主な外生変数の関係は表2になる。

表2 均衡の財生産労働と主な外生変数

	$\bar{L}$	C^M	g	ω	X_M^C	A	B
L^*	+	+	+	+	-	±	±

我々は命題1を得る。

命題1

独裁者が人民に財の生産と自らへの崇拝労働をさせている独裁体制を考える。均衡の財生産労働は、人民の総労働量、独裁者の最低消費要求水準、独裁者が財消費を選好する程度、人民の留保所得の増加関数である。均衡の財生産労働は、崇拝労働結晶物の効率性と、財の生産性に関して両義的である。

この経済では人民が行う崇拝労働から人民は苦痛を被るが、独裁者は満足感を得ている

ので相殺されて、社会厚生ではゼロになるとみなす。この経済における社会厚生 SW は、財の消費総計と考えることができる。財の消費総計は生産量と等しいから社会厚生は財の生産量に等しくなる。財の生産量は財生産労働に関して増加関数だから、社会厚生と主な外生変数との関係は表 2 と同様になる。我々は命題 2 を得る。

命題 2

独裁者が人民に財の生産と自らへの崇拝労働をさせている独裁体制を考える。社会厚生は、人民の総労働量、独裁者の最低消費要求水準、独裁者が財消費を選好する程度、人民の留保所得の増加関数である。社会厚生は、崇拝労働結晶物の効率性と財の生産性に関して両義的である。

このような独裁体制の存続可能性について考えてみよう。(11)で想定している効用関数より、財の消費水準が独裁者の最低要求消費水準を上回ることができなければ、独裁者は効用を最大化できなくなる。あるいは崇拝労働の結晶物をその最低限以上生産できない場合にも独裁者は効用を最大化できない。効用最大化条件(12)が正值の範囲で満たされなくなる。何らかの理由により、パラメーターが変化して効用最大化条件が満たされなくなれば、独裁体制は存続できない。崇拝労働結晶物の効率上昇すなわち「革命的首領観の確立」がなされても独裁体制を支える層の財消費が減少してしまうことは、金正日による「贈り物政治」が困難になることを意味する。

5. ま と め

金日成はかつてスターリンとソ連、中国を礼賛していた。80年代から刊行された「金日成著作集」では礼賛部分が削除ないしは修正された。「党の唯一思想体系確立の十大原則」や「金正日領導者」などより、70年代中頃には金正日が「批准制度」によって北朝鮮社会で指導権を確立していたことは明らかである。従って金日成の著作の削除、修正は金正日による何らかの決済を経てなされていたと考えられる。「社会政治的生命論」により「革命的首領観の確立」を目指した金正日は金日成の著作の一部を削除、修正して、崇拝労働の効率を向上させようとした。モデル分析により、崇拝労働結晶物の効率が向上すると、効率的な労働配分のためには財の生産労働を減らし、崇拝労働を増やす場合があることがわかった。財の生産が減少すると、独裁体制を支える層の消費が減少し独裁体制の存続が困難になりうる。「革命的首領観の確立」がなされても独裁体制を支える層の財消費が減少してしまうということは、金正日による「贈り物政治」が困難になることを意味する。

日本語参考文献

- (1) 韓光熙 (2002) 「わが朝鮮総連の罪と罰」文藝春秋
- (2) 康明道 (1998) 「北朝鮮の最高機密」文春文庫
- (3) 金日成 (1952) 「金日成選集」金日成選集刊行委員会編訳、三一書房

- (4) 金日成 (1966)「金日成二巻選集」日本共産党中央委員会出版発行
- (5) 金日成 (1970)「金日成著作集」未来社
- (6) 金日成 (1980)「金日成著作集」朝鮮・平壤 外国文出版社
- (7) 金東赫著 久保田るり子編 (2004)「金日成の秘密教示 対日・対南工作, 衝撃の新事実」産経新聞社
- (8) 黒坂真 (2013)「金日成と資源配分の効率性」大阪経大論集第63巻第5号, pp 171-180
- (9) 在日本朝鮮人総連合会編 (1995)「金正日略伝」雄山閣
- (10) 張明秀 (1991)「裏切られた楽土」講談社
- (11) 張真晟 (2013)「金王朝『御用詩人』の告白」文藝春秋
- (12) 崔銀姫・申相玉 (1989)「闇からの罅 下」文春文庫
- (13) 朝鮮労働党中央委員会 (1974)「党の唯一思想体系確立の十大原則」世界政治——論評と資料, 1988年4月上旬 (762), pp 28-31
- (14) 黄長燁 (1999)「北朝鮮の真実と虚偽」カッパ・ブックス
- (15) 宮崎俊輔 (2000)「北朝鮮大脱出 地獄からの生還」新潮 OH! 文庫
- (16) 李在根 (2002)「北朝鮮に拉致された男 30年間のわが体験記」河出書房新社
- (17) 李羅英 (1958)「朝鮮民族解放闘争史」訳／朝鮮問題研究所, 新日本出版社

韓国語参考文献

- (1) 金正日 (2011)「チュチェ思想教育で提起されているいくつかの問題に関して 朝鮮労働党責任幹部に行った談話 1986年7月15日」金正日選集11, 朝鮮労働党出版社
- (2) 財団法人韓国軍事問題研究院 (2013)「北韓軍の不便な真実 脱北軍人たちの話」

数学注

$$\begin{aligned}
 \frac{\partial^2 U^D}{\partial L^2} &= U_{LL}^D = -\theta g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta-1} (\gamma AL^{\gamma-1})^2 + (\gamma-1)g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta} AL^{\gamma-2} \\
 &\quad - \sigma(1-g)[B(\bar{L}-L)^\varepsilon - X_M^C]^{-\sigma-1} \{B\varepsilon(\bar{L}-L)^{\varepsilon-1}\}^2 \\
 &\quad - (1-\varepsilon)(1-g)[B(\bar{L}-L)^\varepsilon - X_M^C]^{-\sigma} B\varepsilon(\bar{L}-L)^{\varepsilon-2} < 0 \\
 U_{LL}^D &= \theta g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta-1} \gamma AL^{\gamma-1} \omega + \sigma(1-g)B^{1-\sigma}(\bar{L}-L)^{-\sigma-1} > 0 \\
 \frac{\partial L^*}{\partial \bar{L}} &= -\frac{U_{L\bar{L}}}{U_{LL}} > 0 \\
 U_{LCM}^D &= \theta g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta-1} \gamma AL^{\gamma-1} > 0 \\
 \frac{\partial L^*}{\partial C^M} &= -\frac{U_{LCM}}{U_{LL}} > 0 \\
 U_{LXC}^D &= -\sigma(1-g)[B(\bar{L}-L)^\varepsilon - X_M^C]^{-\sigma-1} B\varepsilon(\bar{L}-L)^{\varepsilon-1} < 0 \\
 \frac{\partial L^*}{\partial X_M^C} &= -\frac{U_{LXC}}{U_{LL}} < 0 \\
 U_{Lg}^D &= \theta g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta} \gamma AL^{\gamma-1} + [B(\bar{L}-L)^\varepsilon - X_M^C]^{-\sigma} B\varepsilon(\bar{L}-L)^{\varepsilon-1} > 0 \\
 \frac{\partial L^*}{\partial g} &= -\frac{U_{Lg}}{U_{LL}} > 0 \\
 U_{L\omega}^D &= \theta g(AL^\gamma - \omega \bar{L} - C^M)^{-\theta-1} \gamma AL^{\gamma-1} \bar{L} > 0
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \frac{\partial L^*}{\partial \omega} &= -\frac{U_{L\omega}}{U_{LL}} > 0 \\
 U_{LB}^D &= (1-g) [B(\bar{L}-L)^\varepsilon - X_M^C]^{-\sigma-1} \varepsilon (\bar{L}-L)^{\varepsilon-1} [(\sigma-1)(\bar{L}-L)^\varepsilon B + X_M^C] \\
 \frac{\partial L^*}{\partial B} &= -\frac{U_{LB}^D}{U_{LL}^D} \\
 U_{LA}^D &= g(AL^\gamma - \omega\bar{L} - C^M)^{-\theta-1} \gamma L^{\gamma-1} \{(1-\theta)AL^\gamma - \omega\bar{L} - C^M\} \\
 \frac{\partial L^*}{\partial A} &= -\frac{U_{LA}^D}{U_{LL}^D}
 \end{aligned}$$